



アガパンサス

90 編の端書きは **祈り。神の人モーセの詩** です。モーセの賛歌は 90 編のみです。 **神の人** と敬称される人々はモーセを筆頭にサムエル、エリヤ、エリシャなどで、民から圧倒的な信頼を受けている預言者、幻に見る天の使いを指します。新約聖書ではパウロの弟子テモテがそのように呼びかけられています。一筋の信仰に生きた人々です。

モーセによって出エジプトが叶い、「十戒」が与えられ、カナンの地を得ることができました。最大の指導者と言えるでしょう。もとはと言えば、モーセはエジプトの奴隷の子であり、逃亡した殺人犯で、孤独と罪責感に苦しむ人間であったのです。モーセは神の前で **わたしは何ものでしょう(出 3:11)** と、告白し、神に用いられることだけが、生き甲斐で、それ以外になんの関心もない無欲な人物です。無に等しい人間であり、裁かれるべき人間であるという自覚に立ちながらも、「**わたしは必ずあなたと共にいる(出3:12)**」と言って奴隷の民を顧みられた神に信頼することによって、モーセは生きる事ができたのです。

冒頭の **主よ、あなたは代々にわたしたちの宿るところ。**との言葉が、インマヌエルを信じ、信頼する詩人の最初の告白です。 **山々が生まれる前から／大地が、人の世が、生み出される前から／世々としえに、あなたは神。(2)** と、万物の創造主なる神と賛美しています。

次に **あなたは人を塵に返し(3)** という告白に、人間は被造物であり、無に等しいものとの自覚がありますが、「**人の子よ、帰れ**」と仰せになります。(3) の箇所、塵に帰るだけでなく、すべての被造物が帰るべき所、即ち、神のもとに帰れと呼びかけられていると、告白します。

人間の時と神の時を **千年といえども御目には／昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません。(4)** と対比させ、その中で生きる人間を **人は草のように移ろいます。(5)** と言いながら、草も **朝が来れば花を咲かせ(6)** と、花として咲く喜びがあることも告白します。花として生かされながらも、人間は罪深い。神の怒りは人間の罪のゆえであり、神の憤りに人間も苦しみ、やがて人間も消え去る。

永遠に存在するのは神のみです。 **あなたはわたしたちの罪を御前に／隠れた罪を御顔の光の中に置かれます。わたしたちの生涯は御怒りに消え去り／人生はため息のように消えうせます。(8)** モーセは罪に向き合い、神の光りの中で罪ある人間を見て、神の前に正しく生きることを願います。 **生涯の日を正しく数えるように教えてください、知恵ある心を得ることが出来ますように。(12)** と祈ります。

詩人の衷心からの願いは **朝にはあなたの慈しみに満ち足らせ／生涯、喜び歌い、喜び祝わせてください。(14)** と、花のように短い命を生きる人間が永遠なる神と共に喜びを共有することです。 **わたしたちの神、主の喜びが／わたしたちの上にありますように。(17)** そのために詩人は心を込めてひたすらに働くことを願っています。 **わたしたちの手の働きを／わたしたちのために確かなものとし／わたしたちの手の働きを／どうか確かなものにしてください。(17)**

『讚美歌 21』は 141「主よ、わが助けよ」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2010-08-03> が 90 編を賛美しています。ジュネーブ詩編歌は、ビオラ・ダ・ガンバ、チェロ、オルガンの合奏です。

<https://www.youtube.com/watch?v=5BWkSY8Upw&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=90>